

平石貴樹 著

『アメリカ文学史』



アメリカ文学は概して深みに欠けるし、小説だって登場する人物がまっすぐすぎる。シンプルすぎる。だいたい、主人公は子供だし、たまに大人の主人公が出てきても子供じみた大人だったりする、といった意見がないではない。

比べてみればわかることだが、ロシア文学の持つあの複雑な味が練り込まれたほろ苦さ、人間の根への執拗な絡み、そして弾劾、祈り、涙、あれがアメリカ文学には乏しい。いったいアメリカ文学だけを読んでいて文学がわかるようになるものだろうか、いったいフランクリンやクーパーやエマソンだけ読んでいて、文学がわかるようになるものだろうか、といった意見がないではない。くわえてアメリカ文学にはフランスやイギリスの散文文学の持つ小暗い書齋の匂い、果てしない過去との対話、これも欠けている。これなしでいったい文学や人間が面白くなるものだろうか、といった意見がないではない。それが証

拠に、アメリカ人の批評家で、アメリカ文学だけを批評の対象としたひとはなきに等しい、あったとしてもそんなひとはちゃんとした批評家ではないのではないか。さらにいえば、アメリカで、アメリカ文学だけを読んで小説家や詩人や批評家になったアメリカ人なんて皆無なのではないか。それは無理なのではないか。アメリカ人で作家や物書きになるひとは、アメリカ文学以外の文学を読めなくては無理なのではないか。翻訳を含めてのことだが。ということは、話が飛躍するが、アメリカの大学に「国文科」があるとして、何のためにあることになるのだろうか。すくなくとも文学のためにあるのではなさそうだが、ということにならないか。かれらの書くかれらの「国文学史」は何のために書かれることになるのだろうか。文学のために、ではなさそうだが。

一方で、20世紀はアメリカ小説、アメリカ詩の世紀であって、こっちは面白い。全部が面白いわけではなくて、技巧的すぎる詩や小説も散見して、それが虚栄心的に面白がられているフシもあるけれども、同じ20世紀、西ヨーロッパの詩や小説はオシャレすぎで、考えすぎで、哲学的すぎで、ちょっと可笑しいくらいにインテリ向きなのに比べると、アメリカの20世紀文学に見えるあのまっすぐな激しさ、あの素朴な繊細さは文学だ。20世紀のアメリカが、半分は野蛮な国であったればこそ、半分は貧乏後進地域であったればこそ、20世紀はアメリカ文学だった、ということになる。

となると、アメリカ文学は、詩も小説も20世紀文学の特色しかないのであって、20世紀モダニズム文学の目を通して見て面白いものが面白いということになる。19世紀のメルヴィルやホーソン、ホイットマンやディキンソンも20世紀アメリ

カ・モダニズム文学として読んで面白いというべきなのだろう。アメリカ文学は、永遠の「新興芸術派」ということになる。なぜそうなったのか、本書はそれを解き明かそうとしているようだ。そして、本書は「かれら」の「国文学史」ではなく、われらの「アメリカ文学史」として解き明かそうとしている。だから全5部構成の第V部「戦後文学——自我をつくろう」が特に素晴らしい。とって、ここが素晴らしいのは、直前の第IV部「モダニズムの文学——自我がゆらぐ」が素晴らしいからでもある。ということは、第III部「近代小説の展開——自我がためされる」は第II部「アメリカン・ルネッサンスの隆盛——自我をうたう／うたがう」が、第I部「伝統の形成——自我の原風景」は序文が、ということなのだが、この連鎖を「自我」の諸相の連鎖と断絶でつなぐ。それで整然となるのである。これ以外の整理の方法はあるまいと思われるほどだが、著者の自我がゆらぐこととの関係でこれほどにも整然としているのだろうか。文学のためのアメリカ文学史があらわれて私はとてもうれしい。(松柏社、2010年11月、A5判 xxii+598頁、6,800円)

——千石 英世 (立教大学教授)